氏　名	Msuya Elibariki Emmanuel

（論文内容の要旨）

タンザニアでは、多くの小規模農家が主要穀物である白トウモロコシの生産に携わっているが、生産性が低く所得も低い。タンザニアにおける貧困問題の解決のためには、これらの小規模農家の救済が鍵となる。本論文は、このような貧困問題の解決に真正面から取り組んだ力作である。

本論文の構成は次の通りである。まず第1章で上述の研究課題を提示した後に、第2章ではタンザニアの白トウモロコシ生産・流通の実情を概述している。そこでは、小規模農家の生産性が低いのみならずバラエティが大きいこと、適切な価格情報を入手できないため、小規模農家が安い価格での取引を余儀なくされていること、（食料の安定供給のための）政府による地域間取引の制限が白トウモロコシの価格を低めていることなどが指摘されている。第3章と第4章では、生産要素の調達から生産物の販売経路を含む「バリューチェーン（価値連鎖）」という分析枠組みを提示し、技術的効率性をはじめとする理論的概念を説明した後に、ケース・スタディの方法について検討している。

これらの準備作業を踏まえて、大規模なプランテーションが主流の地域（Kiteto）と小規模農家中心の地域（Mbozi）においてアンケート調査を行なっている。このアンケート調査は、267人の農民、80人の取引業者、75人の消費者などを対象とした詳細なものである。このアンケート調査にもとづいて、第5章では白トウモロコシ生産・流通について検討し、貸付資金市場が整備されていないために、小規模農家が農機具、肥料や改良品種の種子を購入できないこと、価格情報が入手できないため小規模農家が価格交渉力を持っておらず、これらのことが低所得の要因となっていると指摘している。第6章では、計量経済学の手法を用いて効率的生産関数を最尤法を用いて推定し、大規模なプランテーションが主流の地域（Kiteto）と小規模農家中心の地域（Mbozi）を比較することによって、小規模農家の生産性の低さを検定している。その上で、低い生産性の要因として、資金不足のために農機具、肥料や改良品種の投入が積極的に行なわれていないこと、さらには販路が整備されていないために増産の誘因が乏しいことなどを指摘している。

このような現状分析を踏まえて、第7章以降では、貧困解消のための方策について次のように論じている。まず第１に、貧困問題の解消のためには農業の商業化が必要であり、そのためには生産物（白トウモロコシ）市場の整備が不可欠である。第２に、コーヒーなどの換金作物を例としながら、バリューチェーンの効率化のためには生産者の組織化が必要であり、このような商業化によって流入すると予想される海外からの直接投資を上手く活用するための仕組みとして「統合的生産者スキーム（Imtegrated Producer Sche

me）」のような契約栽培方式が有効である（第8章）。そして、農業の生産性向上のためにはバイオテクノロジーの積極的活用が鍵となるが、現在商品化されている遺伝子組み換え品種の「上からの」導入ではなく、小規模農家のニーズに合う形でバイオテクノロジーを再構築することが必要である(第9章)。

第10章では要約を行なうとともに、貧困問題に対処するためのさまざまな施策間の関係について論じている。

氏　名	Msuya Elibariki Emmanuel

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、タンザニアにおける貧困問題の解決に真正面から取り組んだ力作である。

本論文の長所は次のとおりである。まず第1に、論文内容の要旨で述べたように、本論文は課題設定、予備的考察、実証分析、それにもとづく政策提言という整理された形で議論が展開されている。第2に、多くの先行研究が商業化の必要性を指摘するだけであるのに対し、本論文では、商業化を妨げる諸要因を解明した上で、それらの制約を取り除いて市場を創出するための方策について意味ある提言をしている。第3に、生産要素の調達から生産物の販売経路を含む「バリューチェーン（価値連鎖）」を分析枠組みとすることで、単に白トウモロコシ生産の非効率性を指摘するのみならず、信用不足や未整備な生産物市場など、その原因となっている要因を検討している。最後に、本論文の主要部分は国際学会で報告され高い評価を受けると同時に、査読付きの国際的学術誌に掲載されている。

本論文の問題点としては、まず第1に、第6章の実証分析の結果をみるかぎり、家族労働が白トウモロコシの生産性に（有意ではないが）負の効果を与えている。家族労働が中心の小規模農家は生産性が低いと同時に、キャッサバやヒマワリなども栽培している。これに対して、大規模なプランテーションは雇用労働が中心で生産性が高い。家族労働の係数が負となっているのは、これらを同時に推計したためと考えられるが、２生産物モデルの適用など、計量モデルに改善の余地がある。第2に、海外直接投資を通じて参入が予想される多国籍企業を含む民間企業の市場調整者としての役割が、小規模農家の組織化との関わりで強調されているが、実績のあるコーヒーなどの換金作物と自給的性格の強い白トウモロコシなどの主食作物との生産・市場条件の違い、換金作物でも一部で問題が指摘されている契約栽培方式の小規模農家に及ぼす影響については、既存研究のサーベイを含めて、慎重に評価する必要がある。第3に、市場の整備や小規模農家の組織化（農業協同組合の設立）など、適切な改善策が提示されてはいるが、それらの関係についてもう一歩踏み込んで検討する必要がある。実際、施策の中心となるのは消費地における中央卸売市場の開設であり、このことによって品質別の価格についての情報が入手可能となる。このことは小規模農家に対して品質向上への誘因を与えよう。それと同時に、市場への輸送を効率化するための共同輸送や、効率的な在庫のための小規模農家の組織化を促進する。このように、中央卸売市場の開設が小規模農の組織化の誘因となると同時に、取引費用が軽減されることによって商業化を促進するという側面を強調する必要がある。

このように、本論文には若干の留保事項はあるものの、独創性に富み、タ

ンザニアの貧困問題の解決に向けた有効な施策を提言しており、経済開発分野の研究を大きく前進させている。よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、平成21年8月12日に、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。